

これはこの山の払い下げの受け方にも出ているんだな。

明治時代に、官地を個人に払い下げたときに、大地主になったひとは大勢いるけど、村の共有財産として受け入れた。

当時の神郡村は110世帯くらいあったようだが、大変だったと思うんだよな。いまでは想像もつかないと思うけど、10年くらいで80万本も

▲共有林による恩恵

【木村】村の山がみんなの利益になるのは主に大東亜戦争（第二次世界大戦）が終わってから。その話については、細草川の上のあたりに碑が立っていて、そこに詳しく書かれています。碑は、山について知って欲しいということ、当時6人が集まって神郡共有森林会が建てたものです。当時、学校はいまの普門寺にあったんだ。

みなさん、婆ヶ峰ばあがみねって知っていますか？ ここから歩いてほしい2時間はかかると思うけど、当時の運動会は婆ヶ峰でやったんだ。

これは私の想像だけれど、なぜわざわざ婆ヶ峰でやったのかというと、子どもたちに共有林が見渡せる場所に行つて、山の大切さと大きさを教えたかったんじゃないかと思うんだ。

植林してる、こんなすごい仕事をしているんだ。連帯意識というの、こんなところから生まれているんじゃないかなあと思うんだ。これは自慢できる話だと思う。

植林は、明治25（1892）年くらいから始めた。それ以前は、屋根が草屋根だったから、その萱を刈るくらいしか考えがなく、植林はやらなかったんじゃないかなろうか。

それから、学校が終わってからの青年だな、16〜18歳位、20歳前の青年を集めて10月から12月くらいまで夜学をやったんだ。そこで山林について講義をやっているんだ。それくらいこの地区は山林の教育をしっかりやってきた。

自然を大切に、親しむということ、そんな環境に育ってくれば人間というのは、穏やかになってくるんじゃないかと思うんだよな。

自然ついでいえば、たとえば庭に落葉が一枚落ちているとするよな。それが桜の葉だったり、樺だったりする、それを邪魔者と思うか、見方によって変わってくるよな。たとえば落葉は自然が次の命につながる過程だと思つて、大切なものと思うか。それによって違ってくるよな。

▲山仕事について

【木村】山仕事は一年中だ。冬は落葉さらつたり、薪をとつたりする。春になると草を刈つて肥料にする。秋は木をきつたり山仕事がきつくなる。年中山にはいつている。

この地区は、（田や畑の）耕作面積は他の地区に比べて半分くらいから三分の二くらいかな。それでも収入の面で安定しているのはなぜかとなったれば、この土地は冬作でも、けつこうできる、それから山の副産物が採れる。

山の副産物というのは、薪だな。家によつてはでっかい木小屋を二つももつていて、薪を採つて乾燥させ売った。材木は村の財産だけど、薪は個人で採ることができた。

ただ、火事になったときは、家を新しく建てるときに、四間×七間（二間は約1・8m）の家を建てるだけの梁と柱について（共有林の木を



共有林の松は、今も田井小学校に残っています

山の草管理は、肥料など欲しいひとがそのひとの力によつてやった。精農家は、草刈りや落ち葉掻きを一生懸命にやつたし、割と仕事する事がいやなひとはあまりやらなかったり。大正2（1913）年に『田井村の郷土史』が書かれた。ここには人糞を金に換算している。それだけ大切な資源ということ。山からの落ち葉や草は、人糞なんかと混ぜて肥料にしてた。各家庭にはどこにも肥料小屋というのがあった。露天で肥料を作ると成分が逃げてしまうので、屋根の下で作つた。いやあ、今からちょうど百年前にこうした暮らしをしていたと思うと、あまりでかい顔できないよな人間は。

落ち葉一枚でも山のありがたさを感じられれば。

いまは山は（荒れてしまつて）邪魔者みたいに思っているかもしれないけど、我々は山には世話になつていると思うんだ。だから、大事にしてもらいたい。



○「語りの集い」を終えて

田井地区のことを知らない方もいたので、榎田智司さん作詞・作曲の「桃源郷へ続く道」を筑波山麓の四季の画像とともに流した。また、木村さんの語りの後に神郡の櫻井勇さんの手書き地図をみながら語り合つた。昭和6（1931）年生まれの勇さんが子ども時代遊んだ山麓の地図は、木村さんの語りを裏付ける資料として有効だった。

昭和30年代以降の石炭から石油への燃料革命により、山林の経済的価値が相対的に後退。山で仕事をした方が高齢化するなかで、その記憶も年々薄れてゆく。過去は未来を描く

道しるべであればこそ、木村さんをはじめ山の語り部の記録は貴重であり、いま取り組まなければならぬ喫緊のテーマといえる。

野末たく二（結エディット）

○「語りの集い」に参加して

ほのぼのしてましたね。ケーキも美味しかったです。最も勉強になったのは、山には杉、松、檜など沢山の種類の木が植えてあつたけれど、茅を一番栽培していた、ということ。山も耕作地だったという話が新しい発見でよかったです。

寺崎拓男（土浦市藤沢）

【山に関する補足史料】

木村嘉一郎さんの語りを補足する上で『筑波町史（下巻）』の以下参照（Pは同書ページ数）。

・明治23（1890）年の世帯数、人口は神郡「114世帯、784人」、田井村全体で「320世帯、2107人」／P213

・青年会は、田井村に限らず、日露戦争後に国威発揚の意味から各地で行われ、旧・筑波町域では田井村のほか小田村、作岡村、田水山村、北条町などで実施。内容は貯金、新聞など図書共同購入・閲覧、講習会、夜学、道路や堤防の補修など多岐にわたる／P266～273

・明治14（1881）年に払い下げの田井村共有林は、その後、臼井村と神郡村との間で所有者が変遷していく／P351～352

・山がもたらした恩恵として「一般的農産物のほか、同村の特徴をなすものに年額1万円を超える薪炭（まき、すみ）、700円程度の氷製造、水車を使つての製粉業（同2～3万円）、製麺業（1万円）など」とある。当時の米価を1kg0.1円（10銭）、現代の米価を1kg300円とすれば当時の円の価値は現代の約3000倍。田井村の山の恵みがいかに大きなものであったかが分かる／P394～397